

平成 22 年 5 月 13 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18530514

研究課題名（和文） 夢について親子で話すことの発達の意味をさぐる

研究課題名（英文） The developmental meanings of parent-child conversation about their dreams.

研究代表者 麻生 武（ASAO TAKESHI）

奈良女子大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：70184132

研究成果の概要（和文）：4つの研究を行った。1つは、夢をめぐる親子の会話の研究である。幼稚園児・小学校1年生・3年生の親子53組に夢について会話してもらった録音データを分析した。2つ目は、幼稚園児の夢理解についての研究である。年少・年中・年長計90名の夢理解に関して現象学的な研究を行った。3つ目は、大学生が覚えている一番幼いときの現実の記憶と夢の記憶に関する研究である。4つ目は、大学生の夢理解に関する研究である。それらを踏まえて夢を大切にす文化の創出の重要性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：Four studies about dreams are carried out. The first is the study about parent-child conversation about their dreams Participants are kindergarten pupils and the first grade students and the third grade students and their parents The second is the study about understanding of dream in kindergarten pupils We use a new method that is named the phenomenological questioning method The third is the study about the earliest recollections of childhood events and dreams. The fourth is the study about young adults' understanding of dreams It is proposed that we need to create new culture that don't underestimate dreams.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,800,000	660,000	3,460,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：夢、エピソード記憶、親子の会話、架空世界、夢についての認識、夢概念の発達、就学前児、大学生

1. 研究開始当初の背景

現在、夢に関する主要な科学的な研究は脳レ

ベルでなされている(Hobson,2002;

Foulkes,1993)などがすでに一定の成果をあ

げている。しかし、これらは脳の活動としての夢研究であり、人々の夢会話の研究ではない。人々の夢会話や夢理解についての研究は、どちらかと言えば、歴史的な研究や文化人類学的な研究が盛んである(『夢と人間社会』)上下, カイヨワ他編,1978)。発達心理学的な子どもの夢理解に関する研究は、心の理論がらみで近年 Woolley(1995)によってなされているが、この研究には欠陥がある。それは、夢を脳の活動としてとらえるという前提で子どもたちに課題を与えている点である。それを批判し独自の課題で夢理解を明らかにしたのが麻生・塚本(奈良女子大学文学部研究年報,1997)である。親子の夢会話についての研究は、麻生の『子どもと夢』(岩波書店,1996)をのぞけば皆無と言ってよい。麻生はこれまでに従来の子どもの夢理解の研究が「科学的夢観のバイアス」が強く不十分であることを折々指摘してきた(「子どもの夢からみえてくるもの」麻生『プシコ』第6号 pp52-59.2001)。今回の研究領域は、4つのアプローチともすべて従来の子どもの夢研究の盲点をつくものである。これほど重要なテーマが、看過されていること自体、近代科学的な夢観があまりにも自明視されてしまっていることを示しているように思われる。なお、本研究は、フロイト・ユングなどの精神分析の夢解釈の立場を採用しない。過度の理論バイアスを避け、何よりも事実・現象を重視して研究することをモットーとする。夢に関する脳研究の知見は慎重に活用する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、夢語りの豊かな教育的機能を再発見するために、夢に関する親子の会話や、今日の子どもたちの夢理解のあり方などについて組織的に探究することにある。本研究は、子どもの夢理解についての純粋に発達的研究であると同時に、「他者との夢会話」

を促進させるような教育実践的な関わりを今後開発していくための基礎研究でもある。

柳田園男(1938)が「以前は田舎では夢の話をする人が今より多かった」と指摘しているように、かつては夢を他者と語り合うことには、人々の間に奥深いやわらかな共同性を創り出す機能をもっていたと推察される。しかし、今日の近代社会では、夢のもつそのような社会的な機能はほとんど無視されてきた。だが、親子の間で、クラスの友達同士の間で、夢を語り合うことは、まったくなくなってしまったわけではない。そのような活動が、どのような発達の意味をもっているのか、探索しようというのが今回の研究目的である。

自分のみた夢を語り、他者と分かち合うことは、当然、現実世界についてのそれらとは異なっているはずである。自分の夢を他者に聞いてもらうとき子どもは主人公である。どんな荒唐無稽な体験も、夢を聞いてくれる他者は受け入れてくれることが多い。そこには自分の物語を受容される体験がある。他方、夢の世界は、他者の手に届かないところにある。そのことを、子どもたちは夢に関する他者との会話から気づいていく可能性がある。夢体験や他者との夢会話を通じて、子どもたちにしだいに新たな「現実観」「自己観」を手に入れていくものと考えられる。しかしながら、今日では夢語りの会話がもつそのような豊かな教育的な機能が忘れ去られてしまっている。バーチャルな世界が子どもたちに圧倒的な影響を与え始めている今日、もっとも素朴で根源的な体験である「夢見」を、他者とどうやって共有し、自分の体験として取り込んでいくのか発達的に解明することはきわめて有意義であるように思われる。このような目的のために、従来なされてこなかったような新しい視点から、夢に関する多角的な研究を行う。

3. 研究の方法

本研究では、以下の4つの方向から研究を行った。

(1) 夢についての親子の会話の分析：幼稚園年長児・小学校1年生・小学校3年生の親子の約計50ペアに夢についての会話を10分ほど自由に行ってもらい、子どもの性別や学年、親子の雰囲気でいかに会話に変化があるかを調べる。また親子で夢を語り合ったことが、楽しい経験であったか否かなど、親子それぞれの感想についても分析する。

(2) 幼稚園児の夢理解の実験的研究：幼稚園児が「夜布団に入いたはずなのに自分が動物園にいる」といった不連続体験をしたとき、その体験を果たして“夢”と名付けることができるのか、また夢の“因果性”“共同性”“フィクション性”について子どもたちがどのように理解しているのかを麻生・塚本(1997)を参考に考案された新たな課題によって調査する。夢体験を子どもたちがどのようにとらえているのか明らかにする。

(3) 大学生への最年少時の夢についてのアンケート調査：大学生に一番幼いときの出来事の記憶と一番幼いときにみた夢の記憶とをアンケート調査する。現実生じたこととして記憶されていることがらと、夢の出来事として記憶されていることがらの差異を分析し、両者の類似点や相違点のもつ意味について研究する。夢が、現実の体験に近い、エピソード記憶としてその人の人生を豊かにしている可能性を探る。

(4) 大学生20名に彼女たちが夢に関してどのように考えているのか、夢が生活にどのように関係しているか、正夢や死者が夢枕に立つといったことをどのように考えているのか、夢に関する科学的な捉え方、またロマン主義的な捉え方をしているかなど半構造インタビューを行う。

4. 研究成果

第I研究「夢をめぐる親子の会話：53組の

母子の夢会話の分析から」では、幼稚園児・小学校1年生・3年生の親子53組に夢について話し合ってもらったデータを分析して、親子の夢会話の可能性をさぐった。幼稚園児では、対等の対話というよりは、母親のサポートで子どもが自分の夢について話すといったパターンが大半であった。小学校3年生頃になると、少し早熟な女の子の場合、親子で会話のイニシアティブをめぐって駆け引きがなされるような雰囲気になってくる。互いの夢を尊重し、会話を行っていくという習慣は今日の私たちには見られなくなっているのかもしれない。しかし、その種火はまだ灰の中でその力を失わずその高温を保っているようにも感じられた。互いの夢を語る新しい習慣を創り出すことで、家庭や学校に古くて新しい夢文化が生まれることを期待したい。

「はじめに」においても述べたが、自分のみた夢を語り、他者と分かち合うことは、当然、現実世界についてのそれらとは異なっているはずである。自分の夢を他者に聞いてもらうとき子どもは主人公である。どんな荒唐無稽な体験も、夢を聞いてくれる他者は受け入れてくれることが多い。そこには自分の物語を受容される体験がある。他方、自己のみた夢の世界は、他者の手に届かないところにある。逆に、他者の夢の世界は、自己の手に届かないところにある。自己と他者との間には根源的な「溝」があることを、子どもたちは夢に関する他者との会話から気づいていく可能性がある。そのようにして夢体験や他者との夢会話を通じて、子どもたちが「現実とは何か」「自己とは何か」を理解していくことができるのである。だが、残念ながら今日では夢語りの会話がもつそのような豊かな教育的な機能が忘れ去られてしまっている。第1章の研究を読んで下さった方々が、

少しでも親子の夢会話がもつ豊かな可能性を感じとって頂ければありがたいと感じている。

第Ⅱ研究「子どもの夢概念：夜お布団に入って寝るとどうしていろんな所に行けるの？」によって、日本の幼稚園児たちが、欧米の子どもたちのようにステレオタイプの脳活動に還元してしまうのではなく、夢を自分たちの体験に照らし合わせて、夢を理解していることが明らかになった。欧米の子どもたちは幼いときから、自分たちの体験ではなく、科学イデオロギーで夢を解釈してしまっているのだ。夢は不思議な体験である。そこには現実と非現実と違いに関する本質的な問いが隠されている。日本の子どもたちは、その不思議さに真正面からぶつかりつつ、すなおに経験的なレベルで夢について学んでいるようなのである。年長児になると「自分のみる夢が他者と共有されていない」ことなど、夢というものの理解がかなり進んでくる。とは言え、日本の子どもたちにとって、夢の世界はあくまでも現実の世界と地続きなものなのである。欧米の子どもたちのように、夢の中では自転車にのったアリがいてもよいと考えている訳ではない。つまり、夢だからといって、荒唐無稽なことが可能になると考えている訳ではない。むしろ、彼らにとって現実に起こったことは夢でも生じうるし、逆に、夢で起こったことは現実にも起こる可能性を秘めているのである。その意味で、日本の幼稚園児にとって、夢は決して単なる頭の中のイメージではない。ある種の独特のリアリティが存在していることを、皆が感じているのである。そこには、かつて（中世）の豊かな夢文化を持っていた日本文化の残り香のようなものが存在していると言ってよいだろう。

第Ⅲ研究「現実に関する初期記憶と夢に関

する初期記憶」では、夢の初期記憶と現実の出来事の初期記憶とに関して、実際にその出来事や夢が入力されたと思われる時期の年齢に依存した形で、記憶情報がコードされているかを検討した。その結果、3歳の記憶だからといって、3歳の時点の表象能力に合わせた形で事象が記憶表象に貯蔵されているわけではないことが明らかになった。ある被験者がA歳のときの記憶をB歳の時に想起したとすれば、その想起された記憶内容は、情報が入力されたと思われるA歳のときの主体の情報処理能力（認知能力）に依存しているというよりは、その記憶が想起されるB歳のときの情報処理能力に依存しているのである。つまり3歳の時の記憶を20歳で想起したとすれば、その想起された記憶内容は、3歳の認知能力によってコード化されたものが再生されるのではなく、むしろ20歳のときの認知能力によるコード化の影響をもちに受けているということである。

記憶イメージがどのような視点から想起されるのか、興味深い問題である。今回は現実の記憶イメージだけではなく、夢の記憶イメージについても、そのような視点から想起されるのか詳しく検討した。その結果、この種の研究のパイオニアであった **Nigro & Neisser (1983)**たちの報告している事実は、残念ながら確認できなかった。これは、越智(2005)の指摘とも一致している。記憶イメージとその際の想起視点の問題は、1960年代から我が国では北村(1965)によって言及されていたことがらである。問題は、**Nigro & Neisser (1983)**たちの議論を越えて、自己像の問題などともからめて新たに議論されて(麻生,2009a)いく必要があるように思われる。

しばしば人はそれが夢の中の出来事だったのか、現実に生じた出来事だったのか、あ

やふやになることがある。「一番幼いときの夢記憶」と「一番幼いときの現実の記憶」とを尋ねた際に、自分の記憶がそのどちらか自信がもてなくなる被験者が少なからずいた。私たちがみる多くの夢は、きわめて日常的な出来事の夢である。よって、過去の出来事の記憶と、過去にみた夢のなかの出来事の記憶とは、私たちが意識できぬまに混ざり合ってしまった可能性も少なくない。それははたして夢なのか現実なのか、過去の出来事に関する私たちに記憶は、きわめて怪しい。それだけではなく、記憶というものが、想起される時点で常に再編集される改訂版に他ならないとすれば、過去の記憶というものはそもそもきわめてあやふやなものだということになる。それは夢に似ているのである。「浪速のことは夢のまた夢」。秀吉の辞世の句である。死に際になれば、過去に起こったこととは言え、それは夢とさして変わらぬように感じられてもさほど不思議ではないように思われる。

第IV研究「現代人は夢をどうとらえているのか：女子大学生へのインタビュー調査から」では、夢と現実の狭間をいく女子大生の心を追跡インタビューした結果を報告した。現在の女子大生の多くは、夢現象を少なくとも表面的には科学的なスタンスで理解していた。しかし、それと両立可能な形で、夢に関してロマン主義的な捉え方をする者も半数近くいた。とくに死者が夢枕に立つことなどの話題に関しては、ロマン主義的な回答をする者がめだつた。女子大生の少なからぬ者が、夢を睡眠中の脳の活動と自然科学的に理解しつつも、どこかロマン主義的な考え方を併存させていたのである。

このような大学生の夢に関する態度は、2章でみた日本の子どもたちの夢に対する態度と、ある意味似通っているように思われる。

日本の幼稚園児にしろ、日本の女子大生にしろ、両者ともその多くは「自然科学的イデオロギーによる夢解釈」を頭から鵜呑みで信じるような態度は示していない。そこには、夢に関して開かれた態度をもつ子どもや大人の姿がある。夢の世界は、死の世界と容易につながる世界である(麻生,1996, 2009b)。死者は夢の中では容易に蘇る。夢の中で死者に出会ったという夢の記憶と、過去にけるその人との出会いの記憶は、それらの記憶を想起するものにとって同様のリアリティをもって迫ってくると言えるだろう。

夢の問題は、記憶の問題でもあり、死や意識やリアリティの問題とも深く関連している。そこには夢を脳の活動に還元するだけでは解決できない存在論的な問いが隠されている。夢についての大学生へのインタビューから見えてきたことは、そのような夢の不思議を大学生たちの多くが、うまくことばにできないまま、感じている姿である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 倉中晃子、麻生武「夢をめぐる親子の会話」京都国際社会福祉センター紀要「発達・療育研究」22, 63-81, 2008, 査読無

〔学会発表〕(計4件)

- ① 麻生武 夢について親子で話すことの発達の意味を探る. 第71回日本心理学会ワークショップ「夢研究の新しい展開」(企画者松岡和夫・岡田斉、司会畠山孝男) 2007年9月20日 東洋大学6号館
- ② 吉良尚子・麻生武 子どもの夢概念：夜お布団に入るとどうしているんな所に行けるの? 日本発達心理学会 第19回「大会発表論文集」p.693. 2008年3月21日 大阪国際会議場
- ③ 倉中晃子・麻生武 夢をめぐる親子会話

に関する研究 日本発達心理学会 第19回 「大会発表論文集」 p.812. 2008年3月21日 大阪国際会議場

- ④ 覚前未央・麻生武 現実の初期記憶と夢の初期記憶：両者の類似性と相違点について 日本発達心理学会 第19回「大会発表論文集」p.491. 2008年3月21日 大阪国際会議場

〔図書〕(計3件)

- ① 麻生武 倍風館「発達と教育の心理学：子どもは「ひと」の原点」2007年296頁(特に第4章 pp.95-132.)
- ② 小路田泰直(編著) 岩田書店「死の機能 前方後円墳とは何か」2009 (麻生武 分担執筆 pp.171-196. 「霊魂」発見のプロセスについて—佐藤弘夫著「死者のゆくえ」を読んで) .
- ③ 麻生武「夢について親子で話すことの発達の意味を探る」(平成18年度～平成21年度 科学研究費補助金(基盤研究(c)) 研究成果報告書) 冊子体(総頁数94) 2010年3月

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

麻生 武 (ASAO TAKESHI)

奈良女子大学・大学院人間文化研究科・教授
研究者番号：70184132

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

① 吉良尚子(KIRA NOKO)

福岡家庭裁判所調査官

② 倉中晃子(KURANAKA AKIKO)

京都市小学校教諭

③ 覚前未央(KAKUZENN MIO)]

心理関係職嘱託

④ 滝田景子(TAKIDA KEIKO)

一般企業勤務